
Song to give you

右翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Song to give you

【Nコード】

N2845F

【作者名】

右翼

【あらすじ】

音の無い唄を君に届けたい。音が無い分、気持ちだけは沢山詰まってる唄を…更新不定期です…

#0 プロローグ（前書き）

誤字脱字など、教えてください。嬉しです。

#0 プロローグ

君を見ていると、腹が立つ。

どうしてそんなに自己中で、周りを見ないで突っ走るんだ。

君と話すと、話が続かない。

ほとんど無口で、話したと思えば一言や二言だけ。

君を想うと、胸が苦しくなる。

俺の中じゃどうでもいい存在なのに、どうしてこんなに苦しいんだ。

君が居ないと、探してしまう。

正直、居なくてもいいのに、君の身を案じてしまう…

君の第一印象は最悪だった。
睨むし、無口だし、偉そうだし…

でも、君をもっと知りたいと思った俺がいた。
変かな？

でもさ、これだけは言いたい…

君を
……

俺は
……

#1 転校生

ああ… 凄く眠い…

寝たの何時だっけ…

2時？3時？

… 覚えてないや。

とにかく、遅くに寝たのは確かだ。

唄を書くのに集中して、寝る時間なんか忘れていた。

唄って言っても、短い詩みたいなものだ。

それをいくつか繋げて唄にする。

メロディーなんて無い。

その時の気分や、思いをただひたすら書き綴る。

それを中学から続けて、今じゃノート10冊溜まってる。

「あ… 遅刻する…」

そうだった…

今日から俺は高3だった…

まだ卒業じゃなかったんだ…

早く支度しなきゃ。

キツネ色に焼けたパンを頬張りつつ、温かいココアを飲む。

これが、俺の朝の始まりを合図する。

どんなに急いでいても、遅刻しそうでも、これだけは欠かせない。

その結果…

「優斗…また遅刻か…」

「す、すみません」

「毎度毎度…まあ困るのはお前だな。早く席に着け」

「はい…」

やっぱり遅刻かあ…

参ったな…

もっと早く朝飯食べればよかった。

朝飯を抜けば…いや、駄目だ…朝飯は俺の朝の始まりを教えてくれる役目が

「優斗、ぶつぶつ煩いぞ」

「すつ、すみません…」

『くすくすくす…』

畜生…

「今日は新しい転校生を紹介する。入ってこい」

「今頃？」

「女か！？美人がいいなあ」

「イケメンかなっ？」

今頃転校生か。

もうそろそろ卒業だぞ？

まあ、どうでもいいか。

ふああ…眠い…

「親御さんの急な転勤で、今日からここに来ることになった佐倉羽美だ。ほら、自己紹介して」

「…羽美。よろしく」

「可愛い…」

「ツンデレキャラだな！？ああ…ツンデレえ…」

ツンデレってなんだよ。

「ちっ」

女子なんか舌打ちしてるし…

何か、暗い子だなあ。

まあ、いいか。

眠いし、関係無い関係無い…

ん？

何かこつち見て…いや、あれは…睨んでる！？

俺、何か悪いことしたか！？

何もしてない筈だ。

そう、俺はただ座ってただけだ。

何も言っていないし、睨んでもいない。

じゃあ何であの子は俺を睨んでるんだーっ！

「おっ！？優斗、早速目を付けたなあ？このー」

おい担任：あんたは何を言ってるんだ。

睨まれてるのが解らんのか。

「おい、優斗の隣を空けてやれー」

「ちよっ…」

「優斗、羽美の教科書まだ来てないからお前が見せてやれー」

「まっ……」

「以上！授業に遅れんなよー」

「……」

マジかよ……

何で俺が、この子に……

うつうつ……まだ睨んでるよー。

「つ、次は化学だから……ば、場所わかるよね……？」

「……」

反応無しかよ……

辛い……

かといって俺に友達なんて居ないから、頼れないしなあ。
しょ、しょうがない。

「い、い……一緒に行こっか」

「……」

お願いだから何か喋ってーっ。

教室までが長く感じる…

「あら、あなたが新しい生徒ね？私は化学の教師の美麗って言うの。よろしくね」

「……」

先生にも反応無しかよ。

「うぶなのねっ。可愛いわぁ……」

おい…

あんたの捉え方はおかしい。

それにしても、本当に無口だな。

喋れないって訳じゃないしな。

朝少し喋ったし。

何か、他人と関わるのを避けてるみたいにも見えるな。

まあいつか。

「さて、今日は薬品Bと薬品Dを混ぜて、温めてみます。皆さんがグループを作ってやってみてくださいーい」

…やっぱりこうなるのか。
他は4人グループとかなのに、何故俺だけこの子とだけなんだ…
しょうがないか。

で、薬品Bがこれで、薬品Dがこれ…フラスコに入れて温めると…

ボンッ！！！！

「いつ！？」

「……」

この子のフラスコが…ば、爆発した…

「あらー…羽美ちゃん、ちゃんとBとDを混ぜた？」

「……？」

これは、薬品Xと…X！？
どっから出てきたんだ？

薬品Xなんてこの学校にあったか！？

この子は何なんだあつ…

「羽美ちゃんたらあ。ふふふ…気に入ったわ
」

#1 転校生（後書き）

感想など、待ってます

#2 過去

化学の授業での一件の後、あの子は美麗先生に気に入られたようだ。数学の授業も放り出して、美麗先生と話をしている。

まあ、相変わらず無口で少し反応するだけみたいだな。

やつと昼か。

この時間じゃもう売店は長蛇の列だな。

はあ…今日も珈琲牛乳だけか。

屋上行こつと

鍵が掛かってるから、ここをこうして…あれ？

開いてる。

まさか先客？

いや、それは無い。

だってここは俺だけの場所だ。

鍵だって、元々掛かった鍵を俺がちょっと弄った鍵だから、開けるのは俺にしか出来ないはずだ。

鍵…締め忘れたかな…

「いつ!？」

あれは…転校生!？
な、ななな何で!？

しかも飯食ってるし！
しょうがない…教室で食べるか…

「…って、ここは俺の場所なんだけど…」

「………」

シカトかよ…
聞こえなかったのかな？

「あの一！ここは俺の場所な…」

「………」

に、睨むなよ…
俺が悪いのか！？
違うよな…？

ふう…離れて食べよう。

「チューチュー」

「………」

「チューチュー」

「…」

「チューチ」

「ちっ…」

舌打ちされた…

ても…何で転校生は鍵を開けることができたんだ？

こう言っちゃなんだが、鍵をいじらせるとピカ一なんだけどな。
それを壊さないで開けるなんて…
聞いてみよっかな。

「あの一…」

「……」

「鍵…どうやって開けたの？」

「…捻った」

「さいですか…」

捻って開くわけがなかるうに！

ムキーツ！

腹立つなあ！

「…貴方が造ったの…？」

「ま、まあ…」

「ふっ…甘いね」

ふっ…甘いね、だとう！？

この野郎…

俺より凄い鍵造ってみろってんだ。

そうしたら、認めてやろう。

認めるって、何をだろっ…

「……………」

ん？

これは、鍵？

で、これは鎖？

それが俺の足とフェンスに……

……えーっ！？

ちょっ…取れねえ！

何なんだよこれ！

虐めか！？

新手の虐めなのか！？

「…得意なら…直ぐ解けるでしょ…」

「まっ……」

「……昼休み終わる……」

行っちまった……
こ、こんな物っ

カーツ……カーツ……

ああ……カラスが鳴いてる。
いいなあカラスは。
自由に空を飛べて……

「まだ……居たの……？」

「……」

この女っ……

「…解けないの？」

「ふ、ふん！お前が来たら解こうとしたんだ！こんなもん俺に掛かれば…」

駄目でした…

何だよこの鍵穴は。
複雑過ぎて頭が痛くなる。
こりゃ俺には無理だ…

「はあ…はい」

この女…鍵を捻ったぞ？
おろ？

……外れた…

「じゃ」

クソ…

鍵穴はダミーか。

鍵穴が複雑だったからそっちに気を取られてた。悔しい。

転校生は帰っちまったし、俺も帰ろう。

何かどつと疲れた

「ただいまー」

…って誰もいるわけないか。

「母さん、親父。今日変な転校生がきたんだ。無口でさ、俺に取る態度が何かム力つくんだよね。考えすぎだと思っけどさ。はあ…疲れた。風呂入って寝るよ」

俺に微笑みかけてくれる母さんと親父に一日の出来事を話して、風呂の準備をした。

俺には、親が居ない。

俺がまだ小さい時に母さんが病気で死んで、小学に上がった時に親父が事故で死んだ。

その為に、親の愛情を知らない。

母さんに関しちゃ、ろくに顔もわからない。

写真の母さんは若くて綺麗だから、たぶん俺が産まれる前のだろう。

親父は、この前までは嫌いだった。

小さい頃の記憶では、親父は父と呼べる程の人じゃなかった。仕事から帰ってきては酒を飲み、無くなると俺に怒鳴る。

俺にとっての親父は、ただの恐怖だった。

親戚に引き取られ、小中までは面倒見てもらって感謝してる。

俺の親同然だったけど…

亡くなってしまった。

もう爺ちゃん婆ちゃんだったから、しょうがないけど…

そう…親父は嫌いな存在“だった”んだ。

俺が高校に入学する時まで…

『優斗…お前、高校はどうするんだ？入学金とかいろいろ必要だろう…』

『大丈夫っす。何とかありますから』

『でもな、お前の担任としては…』

『じゃあ、帰りますから』

『おい！』

『婆ちゃん爺ちゃん、俺バイトしながら高校通うよ。ごめんね。二人の保険金、使えないよ…』

『郵便です』

『ん？』

『判子お願いします』

『はい』

『ありつしたー』

『これは？お、親父から！？まさかな…手紙？』

これは俺からの誕生日プレゼントだ。

『そっか…今日俺の…』

家じゃ上手く渡せないからな。俺の居ないところで開けるよ！
そして、俺に何にも言っな！

『…………』

最後に…こんな親父ですまん…お前が大人になるまで我慢してくれ…二十歳になったら一緒に酒でも呑もうや。

『馬鹿野郎…本っ当に馬鹿野郎…二十歳まで待ってるよ…死ぬの早すぎだろう…クソ…………』

中には、親父の通帳が入っていた。
コツコツ稼いできた全財産。
それで俺は今の高校に入れた。

ふう…

風呂っていろいろ考えちまうな。
明日は遅刻しないように早く上がって寝よう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2845f/>

Song to give you

2010年10月13日17時25分発行